
スライド

シエン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スライド

【Nコード】

N4034D

【作者名】

シエン

【あらすじ】

ある日、怪しい小包が送られ、そして帯刀したメイド少女があらわれたり。折角入った名門校を入学前に退学したりと。さらに、裏世界の実体を垣間見ることに。……………なる予定。

一日目 その1：主語はちゃんとつけよう

自宅玄関 AM 11：12

春休み4日目のことだった。

僕宛に郵便物が一つ届いた。それは宛先不明な小包。

かなり怪しいそれを僕は何の警戒もなく開けてしまった。今更後悔。

中にはプレスレットらしきものと、黒い紙切れと青い紙切れが入ってあった。

黒い紙を手取る。

それに書かれていた内容はこうだった。

『おめでとうございます。』

貴方様は見事101人の中の1人に見事選ばれました。拒否権はございません。

しかし、勝ち残ればそれに見合う地位と財産が手に入るでしょう。尚、同封されているプレスレットを3月30日午前11時までに装着しない場合は、執行人が貴方を始末します。

プレスレットの詳しい使い方については、青い紙の方をご覧ください。』

.....

.....

.....

...

まっ、次いこ。

今度は青い紙を見ることにした。

取扱説明書

- ・右手にはめる（左手でも可）

□

だけかよー！！！！！！

少ないし、詳しくないし、意味ないし。これいらねえし。

……まあいいや。

さて、と。まだこれに書いてある期限まで4日あるな。

わからないものは、丁寧且つ慎重にと言ったからな。

誰が言ってたんだろ？

……まあいいや。

寝よ。

有言実行と言うことで、僕は自室に戻って寝ることにした。

自室 A M 1 1 : 1 9

さてさて、これはどういうことなんだろう？

僕の部屋に見知らぬ少女がメイド服を着て、正座をし、さらにこちらを睨んでいるではないか。とりあえず、

「失礼しました」

ぎいー、ボタン。

一度ドアを閉めて深呼吸。

すーはー。すーはー。

よし、確認。

ここは僕んちあれば他人。ここでえらいのは僕。あのメイドじゃない。

「よし!!」

気合いを入れていざ出陣!

再びドアを開けるとさつきと同じ位置で鋭い眼光で睨んでいる。しかし、この状況を打破しなければ、

「……なんで、僕の部屋にいるんでしょうか」

つい敬語になってしまった。

気合い負けした証拠だな。うん。

「見たか」

「えっ？」

急な問いかけで反応できなかった。

「見たかと聞いている。早く答えろ」あくまで、正座を崩さず、

それでいて命令口調。……というより、なんで命令されてんの僕?

最初の敬語がいけなかった?

「貴様早く答えぬと斬るぞ」

わぁー、帯刀している。

絶対銃刀法違反とか何とか言ったら斬られるだろうな。

「貴い様ぁー、ここまでシカトされたのは初めてだ。後10秒与えるそのうちに答えなければ斬る。嘘じゃないからな。絶対だぞ」

いや、逆に嘘っぱいでしょ。『じゅーっ』

『きゅー』

突っ込みどころ満載なんだよね、この状況。

『はーち』

『なな、ろく』

なな普通だし!

『じー』

『よん』

とりあえず、

『さん』

正直に言ったほうが

『にーい』

いいだろう。

『いーち』

『ぜーー』

「あー」

「なんだ」

「すいません、見ました」

「別に謝る必要はない。で、どうだ」

「えーっと、あおとしろのしましまもいいと思うけど、僕的には、
清楚な感じの純白がいいと思います」

「？」

あれ？違ったかな。あの子の顔がだんだん赤くなっていく。うん、
斬られるな僕。

「……………っ。死ねえー」やっぱり。

ぐさっ。

僕の後ろのドアに彼女が投げた刀が刺さった。ふー、間一髪。冗談はさておき、このまんまじゃ埒があかないな。では、

「結局、なにを？」

「……………なにがだ？」

「主語がわかんないよ。それじゃ」

「うむ、確かに。すまなかった。だがな、さっきの件は許さぬからな」 ちよつと涙目で睨みつける少女に少しドキツとした。

一日目 その2： 刃物と可愛い子には逆らえない

自室 PM 12 : 31

いやー、やっと理解できた。けど納得は出来ない。

まあ、いままでの話をまとめるところなる。

あの紙はある高校への推薦状。そして、あのプレスレットは校章。つまり……今入ろうとしている高校をやめてそっちの高校に行

け。そして、試験に合格出来れば入学できるとのこと。

しかも断れば殺すし、不合格の場合も殺すらしい。

理不尽極まりないとはまさにこのことだ。

そして目の前のこの少女はその高校の一年生。

そして、僕を抹殺してくれる執行人らしい。

「ところでさ」

「なんだ」

「昼飯にしない？」

「うむ、確かに今は昼時だな。よし、何か作れ」 命令形にも、もう慣れたし。

「はい、はい。で、なんでもいい？」

「余程、不味いものではない限りよい」

「じゃあ、待つててすぐ作るから」

さてと、じゃあ作るかな。

台所 PM 12 : 33

彼女の名前は、既斬 夏葉（きぎり なつは）。僕と同年。
これは、僕が命を賭けて掴んだ情報だった。

『高校って飛び級？』その迂闊な発言がトリガーになってしまったらしい。おかげで刀の柄で散々なぐられてしまった。まだ、腰が痛い。

.....

.....

.....

...

よし、できた。後は持つて行くだけか。

自室

P M 1 2 : 3 7

「なんだ、コレは？」

「カップラーメンだけど？」

「そんなのはな、見ればわかる。」

「不味くはないよ」

「まさか、ジャンクフードがでるとはな」

「好き嫌いすると大きくならないよ」

「こんなモノ食べても大きくならぬ」

「じゃあ、食べない？」

「いや、食べる」

「じゃ、さつさと食べる。伸びちゃうよ」

自室

1 2 : 4 9

結局のところ、おいしそうに食べていた。猫舌らしく、執拗なまでに息を吹きかけている様子が可愛いかった。言わないけど。

さて、と。お腹がいっぱいになったことだし、そろそろ続きといこうかな。

「さっきの話。結局さあ断ることは出来ないんだよね」

「出来るが、死ぬことになる」

それを世間じゃ出来ないともいう。

「どうしても？」

「どうしてもだ」

「君はどうして、その高校に入ったの」

「今の貴様とだいたい同じだ」

「じゃあ、僕の気持ちわかるよね」

「わからんな。貴様と私じゃ違いすぎる」

「性別とか？」

ボカッ。

殴られた。今度は峰で。

その内斬られるんじゃないだろうか、僕？

「まあよい。しかしな、私のことなど話ても別に貴様の状況が変わるわけではない」

「その通りだけどさ、なんか参考にならないかなと思って」

「ならんな。……それで、他にないか？ないならまだ4日ある。じっくり考えるがよい」

拒否られました。まあいいさ、人には言えないことなんて1つや2つはあるからね。

「じゃあ聞くけど、試験つてなにをするの？面接とか？」

「毎回違うらしいが、私たちの場合はな、ある人の護衛だった」

「護衛？」

「言つてなかったか。この学校は普通の学校と違う。才能あるものだけが、その才能を引き出すためだけに政府直轄で創られたらしい。そしてその後はいろいろな大企業の護衛やら暗殺、さらには裏世界の仕事に携わって行くことになるらしい」

初耳だよ。

「じゃあ部活動は？」

「あるにはあるんだが、ほとんどが武術だ。そして大会などにはまず出れん」

「野球部は？」

「ないな」

「じゃあ行かない」

「では、死ね」

刃先が喉元でストップする。

「人生最後の言葉だ言ってみろ」

と言うか人変わりすぎ。

「ごめんなさい」

死んだらサッカーどころじゃなくなる。ここは我慢、我慢。

「ふー。全く優柔不断なやつめ」

既斬さんはヤレヤレと言いながら、切っ先ををおろした。そして言葉を繋げる。

「でも、それが賢い。野球など将来プロ野球とやらに入れば良いではないか」

「そう簡単になれるもんじゃないですけど、仮になるって言ったらやらせてくれるんですか？その学校」

「まず無理だな」

「じゃあ駄目じゃないですか」

「諦めるのが早い。まだ貴様には力が無いが、これに選ばれた以上何か才能があるのだろう？では力がついてから脱獄なり脱走なりすればいいではないか」

なんかこの人かつこいい。……けど、

「そんなこと言っていないんですか」

「よい。やるのは貴様だからな」

……… 前言撤回。この人は真っ直ぐすぎるだけなんだ。

「ちなみにいままで脱走した人は？」

「ここは押さえておくべきところでしょ。」

「いたが、ほとんど死んだらしい」

「じゃあ、可能性はあるんですね」

「まあ、そうなるな」

ゼロじゃない。と言うことは、まだチャンスはあるということだ。

ここで殺されるよりは、はるかにましだね。

「ふつ、貴様は弱気なのか強気なのか全くわからんな」

「褒められたと解釈していいですか？」

「よい」

なんか褒められたらしい。

まあ要するに強くなるしか方法がないわけか。

「既斬さん」

「夏葉でよい」

「夏葉さん」

「なんだ」

「その試験受けることにします」

「わかった。ではここにサインを」

夏葉さんはなんかいっぱい細かい字で書いている紙を取り出す。

その一部分だけ空白の部分があった。

「ここ？」

「そうだ」

「ボールペンでいい？」

「よい」

では、『詩宝院 銀』つと。

「これでいい？」

「よい。貴様はこれで試験中一切殺されても文句一つ言えぬ訳だ」

「え？」

「ここを見る」

そう言つて人差し指を出してくる。

「いい指してますね」

ドカッ。

ぐーで殴られた。

「バカ者、その先だ」

爪ですか？とか言つたら殴られることは明白なのでなんとかこらえることにした。

指の先の紙には細かい字でなんか書いてある。

「えーっと。このしけんを、うけるに、おいて、しんで、もいっさい、もんくを、いいません」

「だそうだ」

「死ぬんですか？」

「さあ？どうだろうな」

「前はとうだつたんですか？」

「死んだ奴もいたな。まあ大丈夫であろう」

この人の言動は、根拠は無いくせに妙な説得力がある。

「まあ、どうせ死ぬならあがいてから死にますよ。死ぬ気は毛頭無いですけどね。」

「その意気だ」

「ところで試験内容は？」

「明日までに来るように手配する」

今までの平穩だった日常が、たった今日という1日だけで崩壊した。

まったく人生は何が起こるかわからない。だからおもしろいんだけど。

まあ、今は試験が筆記になるように祈ることでしょう。

一日目 その3：双子座第九位 ラッキーアイテム わらびもち

自宅 PM3：15

今日、アイツ等の元を離れて懐かしのこの街に帰ってきた。3年振りくらいか。

飛行機で1時間。そこからタクシーで50分弱。

まあ念願の一人暮らしが叶うってワケだ。それに、やっとアイツ等から離れることができた。

部屋は3LDK。高校生が一人暮らしするには広すぎるがまあいいか。

家賃？それはアイツ等が出すっていつていた。

アイツ等も俺を追い出したがっていたし、俺はあそこが嫌いだった。これがアイツ等の力になったことでも、別に不満はない。

さて部屋もだいぶ片づいた。とはいっても荷物なんて何も持ってきてない。あるのは手元のカードと現金二百万ちょい。現地調達してやつた。

「暇だー」

もちろんこの部屋には自分一人しか居ないので、これは一人言になる。癖というやつだ。

テレビをつけてみる。やはりここ数年治安が悪いのがわかる。犯罪行為なんて日常茶飯事。

殺人に至っては2日に1回以上のペースで行われる場合もある。

そしてこの街も例外ではなく、ある犯罪が起きていた。

通称、首斬り魔。

ちょうど3年前からこの街に現れて未だに捕まっていない奴だ。字に書いて読んだ通り首を斬るやつだ。

こいつのせいで、かつての俺はこの街から出なきゃいけなくなった。全くひどい話だ。

まあ、今では別にこの手の事件は世界中で見ればそう珍しくない。殺人が行われてない街の方が珍しいくらいだ。

しかし未だに、この手のニュースは結構放送されている。つか今は昼だぞこの野郎。

チャンネルを変えてみる。

昼ドラ、占い、ニュース、ニュース、昼ドラ、ニュース、再放送バラエティー、ニュース、ニュース、ニュース、釣り番組で、さっきのニュースに戻った。

結果圧倒的大差でニュースの優勝。

……… ってなんだそりゃ。

まあ仕方ない釣りでも見るか。

「へえ、釣りするんですか？」

「しねえよ。ただ他の番組がつまんねえからこれ見てんだよ」

「では、占いを見ましようよ。意外におもしろいですよ」

「俺はあーいうのは……… って待て」

「はい、なんですか？」

「誰だ貴様は」

「申し遅れました。柴雲しづん高校の聖ひじり 優奈ゆうなと言います。」

そう言っぺこりと頭を下げた。

「今時は高校生も強盗するような世界になってしまったのか。だが、生憎俺は今日引越して来たばかりでな、盗めるようなものは何もないぜ」

「いや、あたしは強盗なんかじゃありませんよ」

違つか、じゃあなんだいったい。身長170くらいはある。そし

てセーラー服にトンファーという異色の組み合わせが……ってトンファー！？

「わかった、テメエは人殺しが目的だな」

「違います。人の話を聞いてください」

「じゃあそのトンファーはなんだよ」

「これですか」

と言いながら、彼女は軽くそれを回す。

「そうだよ」

平静を保ちつつ、返答をする。あくまで襲われても大丈夫なように間合いもしっかりとつてある。それでも一応、武術の心得くらいはある。空手をやっていたからな。

2週間だったが。

「試験用です」

「なんの」

「あなたの適性検査ですよ」

そう言っただけで彼女は、3mくらいあった間合いを一瞬で詰めて、俺の眼前30cmにトンファーをつきたてた。

一日目 その4：最初の学校でのあだ名は金色の狼

自宅 PM3:23

彼女はすぐにトンファーをおろした。

「どうです、見えましたか？」

「いいや、見えなかったよ」

あれは目で追えるスピードじゃなかった。でも場数は踏んでいる。だからわかった。

「殺気はなかった、だろ？」

「ええ。充分、合格点です」

「コレが試験か？」

「いいえ、違います」

そんなにあまくないか。

「なんだかわからんが、俺は試験とかいうのには興味はない」

嘘だけど。けど面倒くさい。

「拒否権はないですよ」

「いや、あるだろ普通」

「すでにこの状況が普通とでも？」

たしかに、普通じゃねえな。

「もし、それでも断るなら？」

「その時は、あなたの友人が死ぬことになります」

「俺に友人なんていねえよ」

これは、本当だ。

小中ともに、170を超える長身だったのと金色の髪が災いして、あっちから近づこうとする奴は殆どいなかった。いたとすれば、不良どもだけか。あいつ等のせいでさらに俺の評判は悪くなった。ただ突っかって来る奴がしつこいから顔面ぶん殴ってやっただけなんだが、次の日にはすでに学校中に知れ渡っていて、教師どもに散

々言われたな。それを小5から立て続けにだ。おかげでかなり転校するはめになった。

「ゲームセンター」

「はっ？」

「覚えていますか？4年前のゲーム。ヴァーチャル・サバイバルを」
覚えている。5年前突如、無名のゲーム会社がつて話題になったやつだ。3人1組で行うサバイバルゲーム。対象年齢12歳。誕生日になってからソッコーで行った記憶がある。

「あれか。でも、あれってたしか……………」

「そうです。廃棄になりました」

殺人事件を起こした犯人がたまたまこのゲームの事を言ったせいとかなんとかだったような気がする。

「で、それがなんだ」

「あなた方は、レコード記録叩き出しましたね」

「……………出したな」

「その時の2人が死にます」

「何で、ギンとあいつを殺すことになる？」

……………訂正。

さっき思い出したが、2人だけいた。

まあ、友人って言うていいかわからんが、たった1人だけ俺に不良じゃないやつでついて来る奴がいた。そいつがギンだ。別にいつから一緒にいたかわからないがいつの間にか俺の隣にいた。で、女っていうのは、ただ人数合わせに、ゲーセンでぼーっとしてるのを捕まえた1日限りの友人だ。まあ、ほとんどそいつのおかげで勝ったようなもんだが。

「私が殺すわけではなく、試験で死ぬことになる確率が上がるということです」

卑怯な、あいつ等は俺の数少ない友人だ。……………忘れてたけど。

「……………で、試験って何だよ」

「受けるなら教えます」

「受けてやる」

「じゃあこれにサインを」

そう言つて、やたら細かい字が書いている紙を俺に手渡した。

「ここの空欄でいいのか」

「はい」

大神 龍吾（おおがみ りょうご）記入完了。

「終わった。さつさと教えやがれ」

「せっかちですね、まあいいですけど」

「いいから」

「では、試験内容はこの街にいる首斬り魔の討滅です」

「そうか」

「驚かないんですね」

「逆に納得した。確かに俺がいなきゃあいつ等死ぬな」

「あなたがいれば死なないとでも？」

彼女は微笑する。

「さあな。けどな、あいつと会って生きてんのは俺だけだろ。多分」

母親を犠牲にして。生き残った、俺。その後の糞のような人生。全ての元凶である首斬り魔。

「憎いですか？」

「何が」

「首斬り魔です」

どうやら俺の素性は筒抜けのようだ。

「……別に」

今は興味ない。

「そうですか」

「では、試験は4月8日までです」

「それまでに出来なかったら」

「今は倒すことだけ考えて下さい」

「それも、そうだな」

「では、これを」

「なんだ、これは？」

手渡されたのは青いブレスレット。

「ブレスレットですよ」

「見ればわかる」

「御守りです」

彼女は言い終えてからすぐこの家から立ち去った。

台風のような奴だったな。

さて、取りあえず聞くのを忘れたが、どうやって2人に連絡取り
やいいんだ。

…………… まあ、どうにかなるだろ。

一日目 その5：月の光に照らされて

廃墟

A M 2 : 3 2

息を整える。

やっと逃げる事ができた。 作戦はばっちり。

これでやっと自由になれた。 あんな所はまっぴらごめん。 頼まれ
たって帰ってやるもんか。

「イタッ」

足の裏から血が出ている。 でも当然といえば当然か。 だって裸足
でここまで来たんだから。

今思うとかなり異様な光景だったんだろうと思う。 街中をボロボ
ロの衣服を纏い、裸足で駆け抜ける少女。 自分で言うのも何だけど。
まあ、夜というのが幸いしたけど。 だけど、少なからず人はいた。
「……となると、」

ここにいるのがばれるのも時間の問題だろう。

けど、しばらくは脚が動かない、4キロずっと走りっぱなしだ
ったから。 そして、この怪我じゃいけたとしても、まず遠くまでい
けないだろう。

「どうしようかな」

八方塞がりだ。

あたしは戦闘向きじゃない。

どちらかというと、頭脳労働のほうだ。
だから考える。

思考する。志向する。試行する。

ガタッ

階段のほうから音がした。小さい音だけど、この場所じゃよく響く。どうしよう、あそこに戻されたら絶対殺されてしまう。最悪の場合はここで。

しかし見つかるには早すぎる。あそこでの起床は6時半だった。やつらの確率は20%もないけど、だからといって油断はできない。まあどのみち逃げることもなんて出来やしないんだけど。

確率を信じますか。

「どちらさまですか」

「あはははは」

「笑わないで下さい。こっちは疲れてるんです」

「ごめんごめん。まさか、こうくるとは思ってたなくて」

「疲れてるんです」

内心ほっとしている。やつらじゃないから。やつらのところは戦闘要員は全員女だ。まあ仮にやつらの仲間だとしても、戦闘要員以外のやつには負ける気はしない。無論この怪我じゃ勝てないと思うけど。だけど……………。

「疲れてるところ悪いけど、話しにつき合ってくれない？」

「ナンパですか」

「違います」

そう言いながら、そいつは近づいて来た。もう3メートルもない。

身長170くらいの細身の男。顔立ちからして高校生だと思う。あたしからはそいつが見える。そいつからもあたしのことが見えるわけだ。そいつがいくら目が悪くても、月光があたしを照らしている。

裸足に服がボロボロ。柱にもたれかからなきゃ立つてられないあたしを。さぞかし滑稽なことだろう。

そんなあたしに彼は喋りかける。

「僕の名前は一歩。このまえあゆむ警戒しなくてもいいよ。別に危害を加える気は全くない。むしろ、逆の方だよ」

「逆？」

「そう。君の所属してたの。えーっとなんて言ったかな？」

「九条学園だよ」

嘘を言ってもしょうがないし、もうあたしはあそこの人間じゃない。そうそれ。表向きはお嬢様学校だけど、裏では殺し屋やら暗殺者を育成する場所」

「人体実験もやっています。……あなた裏の人ですか？」

「うーん、裏といえば裏だね。でも、僕達は政府直轄の完全監視下のもとだけど。それに比べて君たちは大企業のお偉いさんたちだから格が違っただね」

「その政府の人があたしごときに何のようです？」

「いいや、僕は政府の人じゃない。あくまでも監視下に置かれてる身。まあ寮長だから規制は緩いけどね。だから出てきた。で、用とというのは、君を勧誘しにきた。君という人材を消すのは惜しいからね」

「あたしには利用価値なんて無いです」

「利用するのは君の方だよ。僕達を利用してあそこから逃げる。あっちには迂闊に手は出せないけど。あっち側も同じさ。全面戦争になるからね」

「戦闘集団ですよ、あっちは。」

「こっちは超能力者だよ」

「……………」

「信じてないな。とは言っても、僕も最初は信じれなかったよ。まあ、なれば解るよ」

「なる気はありません」

「でもなる。それは決定事項。この力は人を選ぶ。そして君は選ばれた」

「誰にですか？」

「さあ？神さまじゃないかな」

悪魔の悪戯。それはあたしが生まれたこと。

天使の悪戯。それはあたしに生きる希望を与えてしまったこと。

神の悪戯。それはあたしに生きるチャンスを与えてしまったこと。そしてあたしは初めて神に感謝した。

一日目 その6：もちろん無農薬です

廃墟 AM3：00

あいつはあたしに応急処置をすると、今日は遅いからやっぱり帰ると言って帰っていった。

去り際に、

「君はまだ見つからない、それは僕が保証する。だから今は体力を回復させるんだ、きたるべき戦いに備えてね」

と、意味あり気にそう言っていた。戦いつて何なのよと言う暇もなくあいつは去っていった。

「ふうああ……眠っ」

あいつが去って急に睡魔が襲ってきた。今は何時かわからないがとりあえず眠ることにした。
考えるのは明日にしよう。

廃墟 PM5：30

目を覚ますと、当たりはオレンジ色に染まっていた。

「今は夕方かな……」

意味も無い呟き。

ふと足の傷をみるとやはりもう治っていた。

これは、奴らの人体実験の成果………と言うわけではなく、最初からあたしの体質だった。昔は学園側にバレたら間違いないく実験台にされると思って怖かったが、今となっては、有り難い。

く〜。

どこからともなく間抜けなお腹の音が聞こえた。

ここにあたし1人しかいないことを考えると、あたしのお腹なわけだが。生憎、今あたしはお金がない。あつたとしても、さすがに街に行けば奴らに見つかるだろ。どうしようと考えてると、またあの足音が聞こえた。

「はろ〜」

その後に間抜けな声とともにあいつが現れた。

「そろそろ起きる頃だと思ってね。そうそうこれ食べる?」

そう言っであいつは、右手に持っている黒い袋をあたしに見せる形であげた。

勿論、食べたいけど、

「条件は?」

絶対あるに決まってる。案の定あいつは

「あはははは、君はやっぱり鋭いな」

とか言って笑っている。

全然気にしてる様子がないのが逆に腹立たしいけど。

「別にそんな悪い条件じゃないさ。ただ僕の話の聞くだけでいい」

「聞くだけ?」

「なんなら食べながら聞いてくれ」

と言って、袋をあたしに放り投げた。中を見ると、トマト×8……

…軽いいじめか。まあ嫌いじゃないし、ニヤニヤしてこっちを見ているあいつのシナリオ通りにさせる気もない。

1つのトマトを手にとって、それをガブリとかじりながらあいつを睨んだ。

そんなあたしを見てあいつはニヤニヤしながら、

「君ならそうすると思っっていたよ」
と言った。

勿論、嘘だろうと思う。つか嘘だよな。何も言わないあたしを見てあいつは勝手に話をしはじめた。

話が終わる頃には既に月が出ており、トマトも全部無くなっていた。

結論から言うと、常識を大きく逸脱して常人ならふざけるなと一蹴する内容だったが、一応あたしは裏で生きていたし、あんな事が成り立つなら、今のファンタジーのような話を信じてもいいかなくらいには思えた。

この時既にこの廃墟が、奴らに囲まれてるのに気づかないほど、あたしの精神はボロボロだった。

二日目 その1：勿論全部食ったけどさ

自室 AM7:55

なぜか俺はアラームの5分前に起きるという習慣がある。それはもはや習性と言い切ってもいいくらいに。今日も例外ではなく、目覚めた。一度でいいからアラーム無しで寝てみようと考えたが、二度と起きられなくなるのはごめんなのでやったことはない。俺は小心者なのだ。

ようやく、頭が回り始めて、昨日の出来事を思い出す。

よくよく考えると、面倒なことに巻き込まれてしまうなと思う。まあ言ってしまった以上しょうがないか。

とりあえず飯だ、飯。

台所 AM8:03

トン、トン、トン、トン、トン。

リズムカルな音が聞こえてきた。無論俺じゃない。自慢じゃないが、俺は料理なんかできないし、そもそも引越して来たばかりなの

に材料なんて用意してない。あるのはカップメンだけ。

考えられる事は、聖って女ぐらいか。まあとりあえず入れればわかるだろう。ガラツと台所のドアを開けるとそこには、見知らぬ男が包丁を持っていた。

「おはようございます。そろそろ目が覚める頃合いだと思っていましたよ。すぐに朝食準備するので、リビングで待っていて下さい」

いや、まず誰だよ。とは言わなかった。恐らく昨日の聖とか言う奴と何らかの関係があると思ったからだ。だから

「飯、食ったらさっさと要件いいやがれ」

「話が早くてたすかりますよ。では、リビングでお待ちください。すぐにすみすから」

こちらを一切振り向かず、そいつは言った。

リビング AM 8:05

そう言えば、全然片づけてなかったな。この惨状は、昨日から全く変わっておらず、むしろ更に散らかった感がある。まあ気のせいだろ。かろうじて、備え付けのソファアの上には何も乗ってなかったので、そこに座って待つことにした。

テレビをつけた。何か占いがやっていた。昨日聖と見たのと同じ局だった。ここの放送局は、占いメインなのか？と、俺は普通考えれば誰でもわかるようなことを真剣に考える癖があるらしい。唯一、少ない友人から聞いた話だ。

俺がそんなくだらない事を思い出していると、台所にいたそいつがリビングに来た。

「いや、またせましたね。もちろん、待たせる気は毛頭無かったですよ。しかし、どうやら私は刃物が不得手なようです」

そう言って、俺の前のテーブルには皿にのったぶつ切りのトマトが

置かれた。それどころじゃなかった。

いかにも食欲をそそらない、むしろ減退させるような。結論から言っと、切らないで食った方がマシと思わせるような。酷い有り様だった。

「……お前トマトに個人的怨みがあるのか？」

「何ですか？」

「……………」

「……………」

「……………一言いいか」

「なんででしょう？」

「農家の皆さんに謝りやがれ！」

「……………御忠告ありがとうございます。どうやら、今回の事で私には刃物は合わないというのを痛感しました。私は既斬の姫君とは違いますからね」

最後のは、よくわからなかったが今の俺には関係の無いことだろう。

二日目 その1：勿論全部食ったけどさ（後書き）

毎回書くの遅いし、少ないし、眠いし。……………最後は関係ないけど
（笑）

二日目 その2：実は最初から演技でした

リビング AM 8：12

「ところで、そろそろ話してくれよ」

あのトマトをなんとか処理した後、俺は話を切り出す事にした。とは言っても、見た目はどうあれ普通のトマトだからあまり時間はかからなかったが。

「まあ、慌てないで下さい。まだ役者は揃ってません。私自身としては同じ話を何回もするという無駄な行為はしたくないのですが、あなたがどうしても私にさせたいなら構いませんが？」

「：わかったよ。俺も無駄な事はしたくないからな。ところでよ、役者って誰だ」

「あなたがよく知っている人ですよ」

「答えに」

俺が言うのとほぼ同じタイミングで、チャイムがなった。あいつは変わらない作り笑いで、俺に行くよう促した。

まあここは1日も経ってはいないが、ちゃんとした俺の家だ。家主が行くのは、当然だろ？

俺は、そいつに背を向け玄関に向かった。

玄関 AM 8：14

鍵がかかっていた……のは、まあいい俺が昨日かけた。あいつ、どうやって……まあ考えても無駄だな。そう思い直して、俺は鍵を外した。

「せんぱい、既斬ちゃんがずっとおいちゃいちゃしてるよ」

「……………おい、抱きつくのは構わないし胸があたっているのもよしとしよう。だがな、俺はお前の先輩じゃねえし、キャラ変わりすぎだろが、お前」

俺の胸元にあの聖というトンファーク女が抱きついてきた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

おい、赤くなるなよ。俺まで、恥ずかしくなるだろ。そして、俯いたまま黙って震えるな、泣いているのか？

視線を更に落として見ると手にはトンファークが握られてあった。

「……………不可抗力ってか、お前が先だろ。だからその物騒な物をしまえ」

聖は俺の顔を見て笑顔になった。

どうやら、分かってくれたようだ。

「お互い今のことは無かったこ

」

「龍吾くん？」

俺の言葉を遮るように、聖が喋った、のはいい。だが、このどす黒いまでの負のオーラはなんだ？どうやら、これを出してる張本人は目の前にいる聖のようだ。

「あの、聖さん？」

つい、さん付けになったのはこのオーラのせいだ、と思いたい。

「つの、なにするかーっ！」

そう言って、右手のトンファークを俺の顎に向かって突き上げた。

それは俺の目には見えない速さで、さで、俺の顎なんて簡単に砕くほどのパワーをもっていた。

それを今の俺には避けれるはずもなかった。

ガキンと金属がぶつかる音がした。俺にわかるのは、トンファークに何かがあたって止まったということだけだった。

それは、日常生活において滅多に見ることのない、ストレートに

言うつと刀だ。それが俺の顎とトンファアの間、ちょうど首の所で止まっていた。とは、いつても顎と刀の間は1cmもない。

「優奈、先の件はお前の勘違いだろ？こやつは何も悪くはない。しいて言えば、先の物言いとその人相だな」

声の方を向こうとして、

「動かぬ方が、良い。頭と胴が離れるぞ」

その場で急停止。刀を見ると、どうやらトンファアを刀の腹で止めたらしい。

だが、何故刃をこちら向きにする必要がある？こっちの考えを知つてか知らずか、俺の疑問に答えてくれた。

「流石に、優奈の一撃を悠々と受けるには無理がある、すまなかつた」

なかなか礼儀正しい人だった。いきなり、人にトンファア向ける奴とは大違いだ。

「こちらこそ怪我をせずにすんだ、ありがとう」

「怪我？馬鹿を言え、あれは首から上がなくなるぞ」

「マジで」

「マジだ」

そう言つて刀を鞘に戻そうとした瞬間。

「すきありっ」

「ごふっ」

鳩尾をやられた。

「すまん、油断した」

とは言つたものも顔が笑つてゐる、さてはグルだったな。恐らく、俺が刀に気を取られてた数秒に合図とかあつたんだろ。前言撤回。やっぱり、聖同等の嫌な奴だ。しかし、俺が何故やられる必要がある？

「元はと言えばあなたがいけないのです。あんな男といつしよに……」

「寝てたことか？」

「っ……………それです！不潔です。ここに来る途中だっっていちやいちや、いちやいちやと」

「別に昨夜は、他に床が無かったただけだ。そして何も起こらなかった。道中だっって普通に会話してただけだ」

「うっ、でも」

「俺をおいて言っって話してんじゃねえー。しかも関係ねえし。よくわかんねえけど理不尽だー」

「狼。我慢が足りないよ、僕なんてここに来てから今まで一言も喋ってないよ」

懐かしい声がした、懐かしい香りがした。そこには懐かしい奴がいた。

『龍』と呼ばれてた俺を唯一『狼』と表現した男。

「おかえり」

「……………ああ」

そこには、何も変わらないままの紫宝院銀がいた。

二日目 その2：実は最初から演技でした（後書き）

性格が変わってる？仕様だよ（笑

二日目 その3：長い長いポーテールに惹かれて（前書き）

もついくつ寝るとお正月です

「ああわかったよ」

勿論、なんにもわかつちやない。まあ意地でもなんとかしてやるさ。んにもわかつちやない。まあ意地でもなんとかしてやるさ。惚れた弱みって奴さ。

なんてね。

いつの間にか空には、月が輝いてた。

ラスト その1：つい

PM 5：37

気づいた時には、既に囲まれていた。

「脱走は重罪。万死にあたいするわ。なぜ貴女のような方がそのような事をしたんですか？」

「うるさいな。籠の中の鳥は飽きたんだよ。それに」
それに今日は、約束の日。

「どうやら50人弱はいるみたいですね。君はそんなに九条の重要部分に関わってたみたいですね」

15人に囲まれているという状況下でもニヤニヤしてるこいつの気が知れない。

あたしの前には彼女しかいない分、少しは動けない事もない。しかし、後ろに待機している30人前後のせいで、逃げるにはまず無理だ。

「まあね。それでも2課の所長を勤めてたからさ」

お互いの手の内がわかってる状態で数が多いほうが勝のは必須。

「へえ、その若さですごいですね」

やっぱあいつらに期待するのは、お門違いだから、こいつが鍵かな？

「あんたも十分若いでしょ」

「ごちゃごちゃうるさいです。どうやら、そちらの方も十分こちらの事情を知っている訳ですね。あなたにはここで消えてもらうことにします」

「別にいいけど、いいの？あたしが死んだら、あそこの情報が全世界に流れるようになってるのよ」

もちろんブラフだが、時間を稼ぐことに越したことはない。

「それくらい承知しています。だから貴女は生け捕りにさせていただきますよ。勿論、今言った事が本当だった場合にはですね。それに、時間稼ぎは無駄です。駄です。1.5km圏内は部下が既に見回って常時更新中です。異常があれば即座にわかります」

だから、あきらめてください。と彼女はあたしに言った。

確かに九条だったらやりかねない。まして、内部に精通しているあたしなんだから、それ相応に。

しょーがない覚悟決めますか。

「言つとくけど、少しは抵抗するよ………被検体238番。秋保^{あきほ}南さん^{みなみ}」

「……流石ですね。九条で一、二を争う頭脳の持ち主だけはありませんね。こうやって私の動揺を煽り、指揮を乱そうとしているのですね。安心してください。無駄ですから」

そして彼女 秋保は薄く笑った。これが彼女が最後に見せた笑みだった。

秋保はダーツを取り出して、片手各3本ずつ持って構える。

「そうそう、言い忘れてましたけど、生きてれば良いと言われてるだけで、五体満足で連れてこいとは言われてませんから。精々死なない程度に避けてくださいね。あなたなら勿論簡単でしょ」

秋保は言い終わると同時にダーツを放った。

でもそれは私に届かない。

「まあ避けるまでもないけど。あたしは有名だから知ってるでしょ？」

「勿論。通称、護鞭^{マモリノムチ}。貴女にはこれもあつたから、2課の所長になれたんですよね。遠距離系の攻撃はほぼ無効。近づけば鞭の範囲に入る。九条のシリアルナンバーぐらいではないですか？互角に渡り合えるのは」

「わかってるなら無駄な事はやめれ」

「護鞭を手放しなさい。彼がどうなっても知りませんよ」

「……………!？」

予想外な事を言われて、一瞬声が出なかった。

「その反応はやはり。調べはついています。こいつが約束の人なんですよ」

調べついてねえし。

「なんか勘違いしてるし。そいつとは、今初めて会ったばかりだし、他人も同然だわ。煮るなり焼くなり、好きにしなさい」

「酷い言い方ですね。トマトあげたじゃないですか」

うるさい、トマトだけで恩着せがましい。

「…………マジ、ですか？」

「マジで」

つか、その情報はあつてるが画像とか準備しろよ。

「うううっ」

「あんたバカでしょ」

「…………バカって言うな」

あつ素がでた。

「で、どうすんの？手負いのあたし相手でもランク外のアンタじゃ勝ち目ないでしょ。引く？」

「バカにしないでください。私は昔の貴女を尊敬しているから、傷をつけたくなかったです。別に名前知っててもらったのが嬉しくて、舞い上がってなどいません」

舞い上がってるんだって、ここにみんな思ってるんだろっな。

「秋保、がんばっ」

「敵のくせに同情するな。しかし、勘違いも甚だしいんです。シリアルナンバーはいますよ。勿論、あなたもご存知の方だと思いますけど、ちよつと遅刻してるので私直々出向いてるんです。本来ならば、前線にいるような人間ではないのですよ」

勘違いしてたお前にだけは言われなくなかったよ。

「人望もないんだな」

「うるさい。黙りなさい」

ダーツの矢を投げてきたが、威嚇にもならない。鞭で叩く。

それにしても厄介だな。迷子ちゃんはセカンドかシックスのうちのどれかだな。

だけどな、

「作者、文才ないんだから、キャラ増やさない方がいいと思うよ。唯でさえ、放置気味だったのに」

「あーっ。あーっ。あーっ。シャラップ黙れ。そっち方面に行くと、軌道修正が難しいんだから」

「冗談よ」

そう言うことにしておこう。だって秋保泣きそうだし。

「僕はいつまでも囲まれてればいいのかな？」

「あなたは用済みです。本当だったら人質の役目になる人だったのに使えないですね」

秋保は、そう言うのと今までずっとおとなしくこのやりとりを見守って待機していた部下達に指示を出した。

部下達はサーベルを構え、あいつに向かっていった。かく言うあいつは、最後まで不敵に笑みを浮かべて、あっという間に、こいつは串刺しになった。

「呆氣ないですね。まあこの人数を相手に諦めなくなる気持ちはわかりますが」

確かに、呆氣なさすぎる。

「おい、大丈夫………なわけないよな」

既に、出血多量で死んでもおかしくないくらいの血は出てる。

「ゲフツ。いく なんでも助け ないと言うの と」

声が掠れて聞こえないが大体言いたいことはわかる。あたしへの不平不満だろ？

「おっ、生きてたか。別に、自称超能力者のお前だったら余裕だと思っただけだよ。まあ、貴様は、惨めに死ぬだけだがな」

しかし表向きそうだとしても、あたしにはわかる。これは、あいつの作戦だ。入れ替わりか、もしくは何らかな、幻術か。とりあえず、あいつが普通の人間とは違うのは確かだ。

「僕は、ここで　い場の　ですね。直ぐに、援　来ると思うので
して下さい」

と言つて、それっきり動かなくなった。

「おい、嘘だろ？返事しろ。貴様は、超能力者なんだろ」

この場合、超能力者なら生きているという論理もおかしいがそんなこと関係ない。あいつに近づこうとした瞬間、右足に鋭い痛みが走った。見るとダーツの矢が刺さっていた。

「ちゃんと避けて下さいと言いましたよ。どのみち彼が何者かにしろ、死んだ者は生き返りませんよ」

それが世の中の摂理というものです。と秋保は言った。

「ちつ。私もすっかり甘ちゃんになったようだね。トマトくれただけのやつに情が移るなんて」

お陰様で残っていた体力もすっかり無くなってしまった。

「もう抵抗するだけ無駄です。これなら、私でもあなたを捕縛できそうですね。わざわざ、シリアルナンバーを呼ぶまでもなかったです」

「これで、書く手間が省け

」

「言つなつて言つてるだろ」

「ジョークだよ」

「全く減らず口が減らない人ですね」

「あたしもそう思う………　うわあっ！」

突如、あいつの死体が青白く光出した。いち早く気づいたあたしは、とつさに目を閉じた。おそらく、あいつの超能力と言うのは、死んでもからもしくは瀕死状態で発生するものなのか。

予想外の出来事に対処できない九条側の焦りや戸惑いの声が聞こえてくる。この状況は秋保じゃ身が重すぎるな。

「まあ関係ないけどさ、つと

やつと、光が収まってきた。だが、視力が完全に回復しきつてない。
い。

しかし、それはあまり関係ないことだった。なぜなら、九条側も

それは同じ。もしくはあたしより悪いぐらいだろう。

そして、音が全く聞こえなくなつて、ただ声だけが聞こえた。

「大丈夫ですか？」

「ただで死ぬとは、思つてなかつたが、それがお前の超能力か？」

ちよつと予想はしていたが、驚いた事実には変わりなく、つい質問とは関係ない思つた事を口に出してしまった。

「違いますか、今はそういうことにして下さい。早くこっちに時間が持たない」

あいつが焦っている？この光の持続時間を言つてるのか？まあいい。光の大元に行けばいいんだろ？

あたしは一步を踏みだそうとした。

「つつ……無理だ。傷が思つたより深い。悪いが運びに来てくれ」

どうやら、矢には、神経毒があつたようだ。まああたしの捕獲命令である以上さほど強いものではないだろう。どうりでさつきから思考が回らないはずだ。

「わかりました。皆さん、プランBです。戦闘準備お願いします」

「戦うのか？」

「なあに、僕自身は戦闘向きじゃありませんが、後はよりすぐりです。……とつ、良いこと思ひつきました。3人の入学試験これから無事脱出ということにしましょう。あの犯罪者はまあ次の機会にでも。ということです。これより、時間は、現代の狭間より未来に移行します」

？言つてゐる事はわからないが、要するに戦うて事だろ。残念ながら、あたしは戦闘に参加出来そうもないが、自身を守るくらい余力はある。

既に、視界は戻つてゐる、光は勢いを失い闇に飲まれ

「あつ」

その後ろには

「ごめん、もたついてさ」

と、紫宝院の倅が笑い、

「よお、遅くなったが約束の時間に明記はしてなかったからな」と、ぶつきらぼくに頬を赤くしてそっぽを向くあたしのおおかみさんの姿があった。

「2人とも遅いぞ。特にでかい方。あたしをそんなに待たせるな」寂しかった。とは声に出さなかった。恥ずかしいし。

光が完全に消え、音が蘇り、この舞台の終焉の始まりを告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4034d/>

スライド

2010年11月12日02時23分発行